

牧歌の検証

——『赤い子馬』と『長い平野』——

杉 山 隆 彦

1

非目的論思考、英雄神話の援用、道化の登場、方陣の理論、プレイ・ノベレット、その他さまざまな方法を用いて自己の文学世界の構築を目指してきたスタインベックは、一九三三年から三八年にかけて、興味ある短篇を十五篇、いろいろな雑誌、新聞に発表している。

- (1) 「贈り物」(“The Gift,” 1933) (『ノース・アメリカン・レビュー』十一月号) (のち『赤い子馬』(The Red Pony, 1937) の第一部となる)。
- (2) 「偉大なる山々」(“The Great Mountains,” 1933) (『ノース・アメリカン・レビュー』十二月号) (のち『赤い子馬』の第二部となる)。
- (3) 「殺人」(“The Murder,” 1934) (『ノース・アメリカン・レビュー』四月号)。

- (4) 「襲撃」 (“The Raid,” 1934) (『ノース・アメリカン・レビュー』十月号)。
- (5) 「由さのつと」 (“The White Quail,” 1935) (『ノース・アメリカン・レビュー』三月号)。
- (6) 「蛇」 (“The Snake,” 1935) (『キンケル・ビーコン』六月二十二日号)。
- (7) 「民衆のリーダー」 (“The Leader of the People,” 1936) (『アゴシ』八月号) (のち、一九四五年に『赤い子馬』の第四部となる)。
- (8) 「自警団員」 (“The Vigilante,” 1936) (『エスタクワイアー』十月号)。
- (9) 「朝食」 (“Breakfast,” 1936) (『エスタクワイアー』十一月九日号)。
- (10) 『聖女ケイト』 (“*St. Katy the Virgin*,” 1936) (ロビキ・フリーデ社のクリスマス出版。一九九部限定出版)。
- (11) 「約束」 (“The Promise,” 1937) (『ハーバース』八月号) (のち『赤い子馬』の第三部となる)。
- (12) 「シムニー・ベア」 (“Johnny Bear,” 1937) (『エスタクワイアー』九月号)。
- (13) 「菊」 (“The Chrysanthemums,” 1937) (『ハーバース』十月号)。
- (14) 「ハス」 (“The Harness,” 1938) (『エスタクワイアー』六月号)。
- (15) 「逃亡」 (“Flight,” 1938) (雑誌では発表されず、『長い平野』(*The Long Valley*, 1938) の中ではじめて発表される)。

これらのうち、(1)・(2)・(4)の三篇は一九三七年に『赤い子馬』として一冊にまとめられた。翌三八年には、(3)・(5)・(6)・(9)・(4)・(8)・(12)・(3)・(10)・(1)・(2)・(11)・(7)の順序に配列されて、『長い平野』として短篇集のうちにまとめられた。更に、一九四五年には、一九三七年の『赤い子馬』に(7)を第四部として加え、今日の『赤い

子馬』が定着した。

2

『赤い子馬』は十歳から十二歳へと成長する少年ジョウディを中心に、父と母と（のちに祖父と）雇人ビリー、及び馬たちを主要な登場人物として、カリフォルニアの農民一家の生活を、そのきびしさとやさしさを、この上なく美しく描いて、スタインベックの持つみずみずしい作家的資質を、あますところなく表現している。

しっかりと一家を守ろうとする強い父カール・ティフリン、その父に妻として従いながら、一家の平和を保つことに腐心する母、父とジョウディとの間に立って、ジョウディの成長に大きく貢献している雇人ビリー・バック、カリフォルニアへの移住のリーダーとして生き、今では父にうとまれながらも、孫のジョウディに開拓の歴史と、開拓者魂を伝えようとする祖父。これらの登場人物の言動は、アメリカ三百年の開拓者物語の現代版と言ってよく、そのような一家によって大切に育てられている少年ジョウディは、家族間の情愛、仲間どうしの友情と動物との間に交される親愛の情に眼を開かされてゆく。

慌しい都市生活の無機的な状況に押し流されているアメリカ人にとって、のみならずすべての現代人にとって、ジョウディ少年の物語は、アメリカ的生活の原型への郷愁を誘うものを豊かに持っているのである。

このようなるわしい牧歌的な日常の中で、しかしジョウディは、それとは反対の厳しい現実へも否応なしに眼を開かされる。大切な赤い子馬ギャピランを冬の雨の中に置いたままにしたことで、腺疫という熱病に罹らせて死なせてしまう。しかもギャピランの死体は、のすり（鷹の一種）の群れに襲われ、眼をくり抜かれるという残酷な目に合うのである。更には、次に生れる子馬を与えると父から約束されるが、その子馬のうれしい誕生は、母馬の

悲しい死との引きかえによって得られるという苦さを伴うものであった。

馬たちの生と死、とりわけ、残酷な死を眼のあたりにすることで、ジョウディは、自然の持つ容赦のない力に對面させられる。自然の荒々しい采配の前では、それまで万能と見えた父も、母も、ビリーでさえも、ただ立ちすくむことしか出来ないことを、ジョウディは知るのである。ヘミングウェイのニックの物語とはひと味違(じ)うが、『赤い子馬』は、いかにもスタインベックらしい、少年の開眼の物語となっているのである。

『赤い子馬』についてももうひとこと付け加えたいのは、方陣の理論の萌芽がここにも認められることである。ジョウディの開眼の物語にとっては、やや唐突のきらいはあるのだが、全篇の、つまり第四部の、最後のところで、アメリカを形成した原型質となった西漸運動について、祖父がジョウディに語りかけるところがある。

「問題はインディアンでもなく、冒険でもない。ここへ来たことですらないのだよ。たくさんの人たちが、地を這うひとつの大きな生き物となったことが大切なのだ。そして、その先頭にわしが居たのだ。その生き物が、西へ西へと進んで来たのだよ。みんながめいめいに求めていたものは、いろいろあっただろう。だが、みんなが一体となったその生き物は、ただ西へ進むことだけを求めていたのだ。たしかにわしはリーダーだったけど、わし(2)がそこに居なくても、誰かほかの奴がリーダーになっていただろうよ。生き物には頭がなくちゃならないからな。」

スタインベックは、一九三五年前後の時期にパンフィック・グループで、「方陣の理論」(“Argument of Phalanx”)という二頁のエッセーを書いている。未公刊の原稿ではあるが、カリフォルニア大学バークレー校のバン

クロフト図書館に所蔵されている貴重な資料である。私は関西大学の中山喜代市教授のお骨折りで入手することが出来た。スタインベックの思想の根幹に触れるので、その要点を次に示す。

人間は究極的な個人存在ではなく、より大きな生き物、すなわち方陣の構成単位である。人間の身体の中にはいろいろな構成単位、つまり細胞があつて、それらはおのおの独自の性質を持っており、したがって死滅すれば他の細胞に取って代られ、また、他の細胞から攻撃を受けて殺されることもある。特殊な機能を持った細胞もあれば、代替可能な細胞もあつて、さまざまである。何十億という細胞が集つて、人間という新しい個体を構成しているのである。しかし、人間は彼の細胞の総和以上のものであり、人間の性質は、彼の細胞の総和が荷う性質とはけつしてイコールではない。人間は、彼を構成している細胞たちの想像もつかない、まったく別個の性質を持つているのである。(第一節)

人間は、彼より大きな生き物、すなわち方陣の構成単位である。方陣にはそれ独自の苦痛、欲求、渴望、闘争があり、それらは、構成単位としての個々の人間の苦痛、欲求、渴望、闘争とは違うものである。ちょうど、個々の人間の苦痛、欲求、渴望、闘争が、構成単位としての細胞の持つ苦痛、欲求、渴望、闘争と違つていゝのと同じことなのである。方陣の性質は、その構成単位である人間たちの性質の総和ではなくて、方陣独自の感情と目的を持った別個の個体(の性質——筆者追加)なのである。そして、その感情や目的は、構成単位としての人間のものとは異質の、次元の違うものである。(第二節)

われわれはこれまで常に、人間を個別的な存在として研究の対象としてきた。つまり、個々の単位としての人間を詳しく調べることで、人間や人間の行動を研究しようとしてきた。それはまるで、人間の身体の細胞を調べ

れば、人間の性質が理解出来ると考えているようなものではないか。方陣をよく観察し、方陣がそれを構成している単位としての人間とはまったく別の、一箇の新しい個体であることを認識し、更に、さまざまな刺激のもとでの方陣の習性をたがいに関連づけ、分析しながら、方陣がこれまでに達成したいろいろな事柄を振り返ってみるならば、われわれは、おそらくやがては、方陣とは何かということや、方陣の性質、その動き、その目的等について知ることが可能になるだろう。そして、無意味で破壊的な、てんでんばらばらな現象が弥漫している今日の世界の中に、方陣の運動を導入することさえ可能となるであろう。(第十節 最終節)

一九三〇年代の大不況という社会的変動の中にあつて、牧歌を守り、復権させるために、スタインベックは、非目的論思考⁽⁴⁾という、どちらかと言えばスタティックな作業手続きを乗りこえて、よりダイナミックな目的意識の明確化を迫られる。非目的論思考を軌道修正して、闘う姿勢を彼が打ち出そうとするとき、方陣の理論がその支えとなり得ることが、右の引用から容易に察せられよう。

3

『長い平野』はスタインベックのストーリー・テラーとしての優れた資質がもっとも良く表わされている好短篇集である。六年の期間に発表した作品の集成であるから、題材の採り方は、当然のことながら多岐にわたっている。しかし、その中で、子供のいない夫婦に焦点を当てたものが四篇あるのは注意してよい。夫婦の年令は、「殺人」、「白いうすら」、「菊」、「よろい」の順に高くなってはいるが、いずれの夫婦の間にも暖い情愛の交流がないことが特徴となっている。

ユーゴスラビア系の無口なジェルカを妻としたジム・ムアーは、結婚後間もなくして、妻が自分の手の届かない遠い世界の住人であることを知る。どんなに努力しても妻との間に心を通わすことが出来なくなってしまう。いっぽうジェルカは、表面上は夫に従順な妻であるが、ジムの留守中に——彼は妻からは得られない女らしさを求めて町へ娼婦を買いに行ったのだ——いとこの男と同衾しているところを、明け方帰って来たジムに見つけられてしまう。ジムはそのいとこを射殺してしまう。事件のあと、ジェルカは、ジムからひどく鞭打たれるが、彼のために、いそいそと朝食の支度をし、そして「あれでいいのだから。まだこれからも、このことであたしを鞭打つ」と甘える。ジムはその彼女をやさしく抱いて、髪の毛とうなじをやさしく撫でてやる。(「殺人」)

若妻メアリーにとってもっとも大切なものは、自分の思いどおりに拵えた庭であり、彼女は、その庭を選んだ男ハリーを夫としている。彼女はその庭へやって来る一羽の白いうずらを、自分の分身として大切にしている。このような妻は夫にとって、「触れることのできなない」(untouchable)存在だ。白いうずらが猫に狙われているので、追いかけてくれと妻が頼むのをとらえて、夫は猫を殺すと見せかけて、うずらを撃ち殺してしまう。白いうずらを殺すことによって、妻を現実の世界に取り戻すことに成功したかに見えたが、夫がうずらを撃つたことを知ったメアリーは、いっそう現実から離れてゆくことになる。夫ハリーは、最後に「ああ、おれは孤独だ」と二度つぶやいてしおれてしまう。(「白いうずら」)

三十五歳のイライザも、夫ヘンリーとの生活に倦怠を感じ、うつくつした毎日を送っている。彼女は菊の栽培に人並みはずれた才能を持ち、菊を育てることで、満たされない気持をまぎらしているのだ。菊は、メアリーの白い

うずらと同様、彼女の分身なのだが、そのことをヘンリーは理解できないでいる。そこへ、幌馬車に乗った中年の行商の鉢掛屋がやって来て、(仕事を売りつけるために)イライザの菊栽培の腕前をほめる。イライザの心の中に、突然出現した見知らぬ男への興味がふくれあがる。心はずませながら、菊栽培の手順などを詳しく説明して、鉢植えをひとつ男に与えるのだが、そのわが分身たる鉢植の菊が、道端に捨てられているのを後で知り、まるで老女のように泣くというのである。(「菊」)

五十歳に近いピーター・ランドールは、モンテレイ郡の中でもっとも信頼されている立派な農夫であるのだが、それは、妻エマの指図によってであるのだ。エマは猫背の夫を立派に見せようとして、彼に、ワイシャツの下に肩当てのついたよろいを着させている。エマは四十五歳にしてすでに、たいへんな老女のようにやせこけ、しわ寄っている。体重も八十七ポンドしかない。「枕のような大きな乳房をした肥った女がおれは好き」なので、彼は一年に一週間だけサンフランシスコへ女をもとめに出掛け、その間毎晩のように娼婦を抱くという生活をし、残りの五十一週は、妻の言いなりに、おとなしく過している。エマが病気で死んで、彼は胸のつかえが下りたように喜んで、二十年間身に着け続けていた肩当てのついたよろいを脱ぎ捨ててせいせいする。しかし長年の習慣から、彼の妻は死後も、生前と同じように、彼の前に立ちふさがって、彼を縛り続けることになる。彼は最後には酒びたりになって、「あいつは死んでなんかいやしない」と友人につぶやくようになる。(「よろい」)

夫婦の間の危機的な状況をテーマとして、しかもそれを抑制された諷刺を利かせた語り口にのせて短篇にまとめた点では、四作品は共通だとしても、「殺人」と「よろい」は夫(男)を視点としており、「菊」と「白いうずら」

では妻(女)を視点としている、という違いはある。そして、なぜか、前者よりは後者において、短篇としての統一された完成度が高くなっていることを否定することが出来ない。

作家の実生活と、フィクションとしての作品の世界とを混同することは、敵にいましめなくてはならないし、実生活がたとえいかようにてもあれ、作家に対する評価は、作品自体によって定められることは、言を俟つまでもない。しかしスタインベックが、夫婦の危機の問題をこのように辛辣に諷刺した作品を、短期間のうちに発表していることは、異とするに足ると考えるので、彼の結婚生活について少し触れてみたい。

スタインベックは一九三〇年一月にキャロル・ヘニングと結婚し、一九四三年三月に離婚している。ふたりの間に子供はいない。子供は、二番目の妻グウィンドーレン・コンガーとの間にトムとジョンのふたりの息子をもうけている。グウィンとは、キャロルとの離婚成立後十日ほどで結婚した。後、スタインベックは、このグウィンとも一九四八年に別れ、翌々年の十二月に、最後の妻イレイン・スコットと結婚している。

キャロルとの離婚が成立したのは一九四三年三月下旬であるが、ふたりの間は完全に冷え切っていて、四一年の末にはすでに、キャロルから離婚請求が出されており、その意味では、ふたりの結婚生活は十一年間であったと「することも可能である。九百ページに及ぶ浩かな『スタインベック書簡集』(Steinbeck: A Life in Letters, 1975)を見ると、結婚当初は、当然のことながら、キャロルのすぐれた才能や、ふたりの蜜月について、スタインベックから第三者宛てに書かれてはいるが、一九四一年の手紙には、苦い思いが託されている。

一九四一年九月末の、エリザベス・オティスとメイビス・マキントッシュ宛ての手紙は、「キャロルには他のところでは平和な生活を見つけてもらいたい。僕と一緒にでは、それは見つけられないのです」で終っている。⁽⁵⁾

同年十月十八日のウエブスター・ストリート宛ての便りの中では、「僕は十三年間いっしょうけんめいだった。

あらゆる努力をしたけど駄目だった。他のやつなら（キャロルと―筆者注）うまくいくだろう」と書いて⁽⁶⁾いる。

離婚成立直後のストリート―ストリートはこの離婚の仲介役となった弁護士。スタンフォード大学時代からのスタインベックの親友―宛ての手紙には、「ふたりの関係は、最初の最初から成功の見込みはなかったのだ。今になってそのことがよくわかる。ふたりが十一年間お互いにどんなふうに傷つけ合ったかが、ひとつひとつ思い出される。でも、それももう終わった」とある⁽⁷⁾。

一九四〇年三月十一日から四月二十日までの六週間、スタインベックは、親友エド・リゲッツの研究に資金援助して、海洋無脊椎動物採集の船旅でコルテスの海（すなわちカリフォルニア湾）へ出掛けた。この時の記録が、エドとの共著『コルテスの海』(Sea of Cortez, 1941)として結実⁽⁸⁾している。スタインベックの生物学的思考が詳しく表出されている重要な文献で、ヘミングウェイにとっての『午後の死』⁽⁹⁾や『アフリカの緑の丘』⁽¹⁰⁾に匹敵するものである。この採集旅行には、スタインベックとエドの他に、ウェスタン・フライヤー号の船主のアンソニー・ベリー、機関士テックス・トレイビス、それに甲板員のスパーク・イーナとタイニー・コレット、及びキャロルの、合計七人が乗りこんだ。しかし、『コルテスの海』全篇の中に、キャロルについてはひとことと言及もなされていない⁽¹¹⁾。これは奇異なことである。

書簡はスタインベックの文学作品ではないから、いちおう措くとしても、『コルテスの海』という重要な作品が、キャロルの全行程参加という事実を伏せていることは、〈作家と作品のあいだ〉にかかわる見逃し得ない問題となるだろう。

ついでながら、一九七五年三月二十五日に私がアンソニー・ベリーをインタヴューした際、彼ははっきりと「キャロルはクルーの一員だった」と証言している。そして、「キャロルが『コルテスの海』の中で言及されていない

理由はわしには何とも言えないがね」とつけ加えたのであった。

キャロルとスタインベックの間が冷たい関係にあったことは、いろいろな理由があったにせよ、事実であって、それがさきの四作品に影を落として、女性心理の解剖となったのだというのは、あなたがち牽強附会ではあるまい。

4

夫婦ではないが、女性の抑圧された微妙な性心理を解剖した作品に、秀作「蛇」がある。「エド・リケッツについで」(“About Ed Ricketts,” in *The Log from the Sea of Cortez*, 1951) の中でスタインベックは、「(エド)の研究所では不思議なことが絶えなかった。ある晩、ちょっとした事件が起こって、私はそれを後に短い物語に仕立てた。ありのままに書いたものであって、あの出来事の意味など私にはわからないし、その哲学的意味について尋ねる手紙が来るけど、返事など出しはしない。とにかく、ああいう出来事があったのだ。要するに、ひとつの事件と言っていだらう。

「ある晩、女がやって来て、雄のながらら蛇を買いたいと言うのだ。たまたま研究所に一匹いて、それが雄だということがわかっていた。檻の中でちょっと前に、交尾したばかりだったからね。女は代金を払って、餌を与えてくれと頼んだのだ。その蛇のために、白いねずみを一匹買って、エドがねずみを檻の中に放りこんだら、蛇はいきなり喰いついて、やおら、呑みこむために、あごを大きく開いたのだ。いちど始終を覗いていた女が、自分のあごを動かして、蛇とまったく同じように、口を大きく開けた時には、ぞっとしたね。ねずみが呑みこまれた後、彼女は一年分のねずみの代金を支払って、また来ると言って帰って行った。しかし、結局、再び現われることはなかったけどね。あれがどういふ事件で、なぜあんなことが起こったのかは、未だにわからない……」と書いている。⁽¹²⁾

一九七五年三月、私がウェブスター・ストリートをモンテレイの彼の弁護士事務所を訪ねてインタビューした際、彼は「蛇」の女について、次のことを語ってくれた。

(1) 「あの女は旅芸人のひとりだったはずで、当時、ブルーベル（モンテレイにあったカフェ）に居た女だった」。

(2) 「姿のいい、ほんとに健康そうな娘だったね」。

(3) 「あの女は二十二歳だった」。

(4) 「ジョンとエドが研究所に連れて来たのがきっかけで、私が、あの日（日曜日だったよ）エドのところに行った時に、あの女がひとりで入って来て、あの短篇どおりの振舞いをした」。

この作品の内容は周知のことなので、ここでは触れない。しかし、その意味の解釈について、札幌大学の加藤光男教授が肯綮に与える卓見を述べているので、紹介したい。(J. Steinbeck "The Snake" 試論) (札幌大学外国語学部紀要『文化と言語』第十五巻第二号、一九八二年)。

……この作品に登場した女性は selfrespect を失い、自己喪失の寸前に Phillip の所を訪れたと思われる。それ故に彼の行う実験などには全く関心を示さず、自分のやらなければならないことだけを追求していく。彼女には母親特有の飼育願望があり、しいたげられた女性が自己を回復する願望、即ち新しい自己への変身願望もあると言えるのである。そのような彼女が、蛇が獲物をとり、それを飲み込むシーンを見るところから、蛇に self

identify し、ナルシンズムを経験し、それがフラストレーションの昇華作用となって本来に新しい自己へと変身していったのである。しかしその際彼女の持っていたフラストレーションは形をかえて Philip に移動してしまふのである。こうしてこの女性は古い自己を蛇に託して Philip の所に残し、自分は新しく再成した存在として存在し続けるのである。それでフラストレーションを背負った Philip がいくら探してもその女性はどこにも見つからないのである。それ故にこそ、Steinbeck はこの女性に黒いスーツ¹³ 喪服を着せ、自分の過去に別れを告げるといふ儀式をさせたといふ象徴性が生きてくるのである。

5

イライザ（「菊」）、メアリー（「白いうずら」）、ジェルカ（「殺人」）と「蛇」の女的的確な描写は、スタインベックが女性の原始的・自然的・神秘的な側面に、並々ならぬ鋭い観察を行っていることをうかがわせる。それはこの作家のノンセンスへの志向と言ってもよい。ノンセンスはセンスに対立する。思慮分別・多数意見・常識・理性、あるいは書物などから得られる知識や法則性を意味するセンスに異議を申し立て、既成の秩序の体系を解体してゆこうとする態度を、高橋康也氏に従って、ノンセンスと定義すれば、彼女たちの言葉と行動は、まさにノンセンスの世界のものだ。

この世に生きる上で、夫（男）たちは思慮分別を要求され、常識豊かであることを義務づけられてきた。そうでない場合は、社会から拒絶されてしまうという苛酷な運命を甘受しなければならぬので、彼らは、可能な限りの努力をして、これらを身につけようとしたのではないか。しかし、それはあくまでも身につける衣裳（「意匠」）であって、その奥では、彼らの自我の本性が窒息しかかっているのである。つまり、センスというよりの重みで、

人間性が衰弱をきたしているという状況があるのである。ピーター・ランドール（「よろい」）のよろいは、きわめて象徴的であると言わねばならない。二十年間も身につけ続けていたために、ピーターは、よろいを脱いでも、それ以前と変らない束縛感に悩まされていたではないか。

身につけたセンスが、ほんとうに必要なセンスであったかどうかの反省が迫られているのである。

このような男性的特性（センス）と、常識や理性などで律し得ない女性的特性（ノンセンス）との葛藤は、世界の現代文学を大きく包んでいる状況であり、スタインベックのこれらの短篇は、この状況と不可分に結びついていると言える。ノンセンスは、たしかに、日常的なセンスへの侵犯であり、その解体を迫るものではあるが、同時に、別の次元では、その肯定であり、組み変えであり、創造でさえあるのだ。

以上の五作品の他に、「ジョニー・ベア」、「聖女ケイティ」のような、幻想怪奇譚があり、「襲撃」、「自警団員」のような、より直接的な社会的関心の作品や、小品「朝食」、それに、のちの『真珠』(The Pearl, 1947)を思わせる「逃亡」など、この作家の関心の幅の広さを裏付ける作品が、『長い平野』には含まれている。

題材の幅の広さはかなりのものではあるが、しかし、これらすべてが、この作家が生れ、育ち、したがって知悉しているサリナスの平野——スタインベック・カントリー——を舞台にしていることが、『長い平野』を、ひとつの統一体としての短篇集たらしめている所以なのである。サリナスの平野こそは、スタインベックの牧歌の原点であり、この原点に立って作者は、少年時代に育まれた牧歌への思いをこめて、そのありようをひとつひとつ検証したのであった。その意味において、ジェームズ・ジョイスの『ダブリン市民』(Dubliners, 1914)⁽⁴⁷⁾、シャーウッド・アランダスの『ワインズバーグ、オハイオ』(Winesburg, Ohio, 1919)⁽⁴⁸⁾を想起しても不自然ではない。その文学的世界は、スタインベックのものとは異質ではあるにしても、前者はダブリンの町を、後者は、オハイオ州クライド

の町を、それぞれに、熱い思いをこめて検証したのであるからだ。

ペニー (Claude-Edmonde Magny, 1909-66) は、その優れたスタインベック論 (“Steinbeck, or the Limits of the Impersonal Novel,” in *L'Age du Roman Americain*, 1948) の冒頭で、『長い平野』がスタインベックの全作品の、かなり完全な概略を提示して、その特徴が、古典的悲劇に必要欠くべからざる (三一一致の法則) のこと、つまり、場所の一致によって、さまざまな主題を統一させている、と指摘している。そして、この場所の一致から生じる諸作品の親近性は、月並みな地誌的限定にとどまらず、作品に一種の靈感を与えているのだと説いている。自分の生れた地域について語るのが、彼に最良のもの、彼にとって本質的なもの、これこそがスタインベックだと思わせるものを、彼に發揮させているのだと、正しく指摘している。

注

- (1) Cf. Ernest Hemingway, “Indian Camp,” in *In Our Time* (New York: Boni and Liveright, 1925).
- (2) John Steinbeck, *The Red Pony* (New York: Covici-Friede, 1937) (The Viking Press: Compass Edition, 1965), p. 180.
- (3) John Steinbeck, “Argument of Phalanx” (Two-page MS., n. d.) (The Bancroft Library, The University of California at Berkeley), pp. 1-2.
- (4) 拙稿『ひよわたな牧歌』あるいは現代病理所見——『天の牧場』論——(『成城法学・教養論集』第一号、一九七九年) 参照。
- (5) Elaine Steinbeck and Robert Wallstan, eds., *Steinbeck: A Life in Letters* (The Viking Press, 1975), p. 233.
- (6) *Ibid.*, p. 234.
- (7) *Ibid.*, p. 251.
- (8) Cf. John Steinbeck and Edward F. Ricketts, *Sea of Cortez: A Leisurely Journal of Travel and Research*.

- (The Viking Press, 1941) (New York: Paul P. Appel, Publisher, 1971).
- (5) Cf. Ernest Hemingway, *Death in the Afternoon* (New York: Charles Scribner's Sons, 1932).
- (6) Cf. Ernest Hemingway, *Green Hills of Africa* (New York: Charles Scribner's Sons, 1935).
- (7) John Steinbeck and Edward F. Ricketts, *Sea of Cortez*, pp. 8-9.
- (8) John Steinbeck, *The Log from the Sea of Cortez* (The Viking Press, 1951) (The Viking Press : Compass Edition, 1962), pp. xxiii-xxiv.
- (9) 尾形龍雄『『シムロン』大辞典』(国文社 一九七七年) 三一九頁参照。
- (10) Cf. James Joyce, *Dubliners* (Grant Richards, 1914).
- (11) Cf. Sherwood Anderson, *Winesburg, Ohio* (New York: B. W. Huebsch, Inc., 1919).